新潟県納税貯蓄組合総連合会優秀賞

花粉症を通して気づいた税金との関わり

長岡市立東北中学校
三年　野本　真央

私は小学二年生の時に花粉症を発症し、三年生の時に深刻なほど症状が悪化しました。かかりつけ医で処方された薬を飲んでも鼻水が止まらないため学校にはティッシュを箱で持って行くほどで、目は酷い痒みで赤く腫れてしまい、濡らしたハンカチで目を冷やしながら授業を受ける毎日が続きました。また、咳が止まらず、咳喘息も発症しました。

そこで、あまりにも症状が酷く改善しないため、私は母と一緒に大きな病院へ行き、検査を受けました。そして、重度の花粉症であることが分かり、「舌下免疫療法」を勧められました。この治療法は、アレルゲンを含む治療薬を舌の下に投与するもので、数年間一日一回服用しないといけないものでした。毎日の服用は大変そうだなと思いましたが、少しでも症状を改善したいと思い、治療をすることにしました。

治療を続けた結果、症状は治療開始前からは考えられないほど良くなりました。どのくらい良くなったかを調べるための血液検査を受けた日、私は治療を始めてからもう五年も経っていることに気づきました。五年間ずっと治療を続けているので、私は医療費に相当な額がかかっているのではないかと思い、母にそのことについて尋ねてみると、子どもは税金の補助のおかげで大人よりも少ない医療費で治療を受けることができるため、長い間続けなければならないこの治療もここまで続けることができたのだと教えてもらいました。

そこで私は、その税金の補助について気になり詳しく調べてみることにしました。そして、「子ども医療費助成制度」のおかげで、子どもの医療費の自己負担額のうち一部、もしくは全額を、自治体が負担してくれていることを知りました。私はそれまで、税金には遠い印象を抱いていました。ですがこの時、私たちの生活を支えてくれている身近な存在へと変わりました。

税金への印象が変わり、私はそれまで気にしていなかったことに目が行くようになりました。普段歩いている道も、通っている学校も、税金がなければ成り立っていないことに気づき、同時にありがたいものだと強く感じました。

私はまだ中学生で、払える税金は消費税くらいしかありません。ですが、自分が誰かの納めた税金によって、治療を助けてもらったように、大人になった時はしっかりと納税して、どこかで誰かを助けるための力になりたいと思っています。